

学校部活動への関わりと社会性獲得との関連性に関する実証的研究

山本 浩二*

荒木 祥一**

神野 賢治***

Empirical Study on Relation between Involvement in Extracurricular Activities and Acquisition of Sociality

Kouji YAMAMOTO, Shouichi ARAKI and Kenji KAMINO

The purpose of this study was to consider the contemporary meaning and the effectiveness of participating in extracurricular activities in senior high schools. Consequently, the effectiveness of extracurricular activities and the relation between sociality and extracurricular activities were confirmed. In addition, the participants in extracurricular activities are more eager than the non-participants in any activity at school. The increase in the number of students who take part in extracurricular activities leads to the revitalization of the school.

Key words: sociality, extracurricular activities, effectiveness of extracurricular activities

1. 緒 言

本学においては、「創造力のある実践的技術者の育成」といった明確な教育目標を掲げており、5年間の早期一貫教育の中で、各自が学生として自覚を持って行動することが要求されている。また、学校部活動（以下、部活動）においても運動部活動（以下、運動部）、文化部活動（以下、文化部）ともに数多く存在しており、学生、教員ともども意欲的に取り組もうとする姿勢がうかがえる。今現在、本学における運動部には約49%（約800人中390人）が所属しており、全国の高等学校運動部活動所属者（約37.4%）¹⁾と比べてもやや上回った所属率であると言える。また、文化部においても約18%（約140人）が所属しており、全体として約67%（530人）が部活動に所属している。

教員においては、昨年度後期より「学校部活動指導の全員化」を図ることとなった。全教員が部活動指導に関わることで、学生とのコミュニケーションの向上、学生への教育機会の拡大、さらには学校の活性化を目指し、新たな取り組みへと動き出している。

2. 学校部活動によせられた「期待」と「不安」

文部科学省は「平成19年度体力・運動能力調査結果」において、運動部・スポーツクラブ所属者と非所属者の間で、体格や体力にどのような差が見られるかを年齢と男女別で比較している²⁾。その中でも高等学校期（16歳、17歳）の子どもに注目してみると、男女とも「体格」・「体力（8種目スポーツテスト）」すべての項目において、運動・スポーツクラブ所属者の方が、非所属者を上回っていた。この調査においては、小学校期、中学校期の子どもにも同様の測定を施しており、その結果、体格面ではわずかに運動・スポーツを行っている方が高い値を示していたが、体力面では、すべての項目において顕著に高い値を示していた。つまり、これらの時期に、運動・スポーツを行うことが、子どもの「体格」、「体力」の向上に関連していると言わざるをえない。

しかしながら今日、部活動に関しては、体格・体力面以外においても多くの議論が交わされている。門脇は、社会をつくり、その社会を運営し、さらには今ある社会をより良いものにつくり変えていく能力を社会力として捉え、その社会力が形成される場として学校の重要性を指摘しており³⁾、それらを受けて中西らは、「運動・スポーツ活動は、子どもの社会力の形成に有意な影響を及ぼすことが明確にされるとともに、学校における体育・スポーツの重要性と存在価値が示唆された。」⁴⁾と述

*一般科目

**一般科目

***金沢星稜大学 人間科学部

べている。さらに運動部活動の有効性に関して、山本らは、高校生を対象に行った調査結果で、「運動部活動の『有効性』は、将来的に良好な社会性を獲得していく予備的能力の開発・開拓に大きな影響力を有している。」⁵⁾と推察している。

しかしながら、部活動に寄せられた「期待」とは裏腹に、「不安」な面を指摘されることも少なくない。水内は、「少子化・生徒数の急減のもとで、少なからぬ学校運動部が、存立の危機に直面したり、活動に支障を来したりしている。」と述べ、少子化による運動部の存立の危機打開策として、複数の運動部による「合同活動」や「地域社会との交流」をあげている⁹⁾。しかしながら、学校の統廃合にみられるように、少子化問題は運動部の存立どころか、学校存立にまで及んでいることが考えられる。その結果、運動部は、学校存立のために、宣伝・商品化され、学生獲得や学校の知名度上昇に利用されるといった状況も見られるようになった。

これらのことに関して、谷口は、「勝利至上主義によって奴隷化し、機械化し、その結果、他者の苦痛に関心を持ったり、痛みを感じたりすることのできない学生が大量につくりだされているのだ。」¹⁰⁾と述べている。

さらに近藤は、「大会必勝主義の下で部活動が過熱し、練習がますますハードなものになってくることによって、部員の日常生活が破綻したり、心身の健全な発達が阻害されるという部活動の弊害はよく指摘される場所である。しかしそれに加えて私は、部員にみられる、部活動以外の生活の貧しさということを、格別深刻な問題としてうけとめなければならないと考えている。」と述べ、練習による過労の慢性化が、学校での学習活動を妨げ、さらに自由な活動時間が著しく制限されることを指摘している¹¹⁾。

このようなことから、「部活動」、特に運動部に関しては、多くの「期待」と「不安」・「問題」がよせられていることがわかる。しかしながら、今年度後期より「部活動指導の全員化」を図る本校にとって、また、部活動の存続が少子化等の事情により危機に瀕している教育界にとって、学校部活動の在り方を再考することは、喫緊の課題であるといえよう。

以上の事柄から、本研究では、部活動と社会性獲得との関連性を把握した上で、部活動の有効性について再考していくこととする。

また、本研究で用いる「社会性」の位置づけとして、個人を取り巻く多様な環境において、自己を発揮し、実現していくための能力を「社会性」として捉え、門脇の言う、「今ある社会をより良い

ものにつくり変えていく能力『社会力』とは区別して考えたい。

3. 研究目的

本研究において言及する事柄は、以下の2点に集約できる。

- 1) 学校場面において、個人の社会性獲得の要因について分析し、学年間さらには部活動所属者と非所属者とを比較・検討する。
- 2) 1)の結果を受けて、高等学校期に部活動に参加することの今日的意味やその有効性を再考する。

4. 研究方法

1) 方法

2009年7月に本学782名を対象に現在の自分自身の生活状態および意識に関する調査を、質問紙調査法により実施した。調査は、調査実施者により、各保健体育の時間帯に配布・回収を行っている。

回収されたデータ数は全対象数である782部であったが、分析対象者は、欠損回答が皆無の704部(有効回答率90.0%)となった。内訳としては、男子636名、女子68名、さらに部活動所属者は489名(運動部所属者274名、文化部所属者215名)であり、以降の分析及び解析においては部活動所属者と非所属者との比較が主となる。

2) 質問項目

調査票に関しては、山本ら(2007)の先行研究をもとに、以下のとおり構成した。

(1) 社会性測定項目

山本ら(2007)が、探索的因子分析によって構造化を図った「高校生の社会性測定尺度(58項目)」を用い、回答を求めている。なお、この分析・解析作業は尺度の信頼性や妥当性の検証作業も包含している。

(2) 基本的属性

性別、学年(学科)、生活様式、中学校時の部活動所属、現在の部活動所属、現在の部活動での顧問教師の関わり方を訊ねる6項目を設定した。

(3) 各ライフステージにおける出来事(事柄)

本校入学後における、実際に体験した事柄を訊ねる18項目を設定し、回答を求めた。

(4) 現在の個人の意識調査

本学独自の行事(スポーツ大会、弥生祭、校内一斉清掃、定期考査)への参加意識を訊ねる

4項目を設定した。さらに学業に対する意識、精神的な変化について訊ねる2項目を設定し、それぞれ「1 大変感じている」～「4 まったく感じない」の4件法により回答を求めた。

3) 分析方法

回収した調査票は、SPSS for windows11.0Jを用い、集計・分析（解析）を行った。作業手順としては、「高校生の社会性測定尺度」の各因子得点をもとに、「学校部活動参加者」と「学校部活動非参加者」間、学年間、性別間において意識差の抽出を試みている。また、回答傾向をt検定によって比較検討している。

5. 結果と考察

1) 「社会性測定尺度」の解釈

本研究で用いている「社会性測定尺度」について概観しておきたい。これについては、山本ら（2007、2008）が先行の研究において用いた「高校生の社会性測定尺度」を援用した。予備調査により設定した58項目について、因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行ったところ、本学生の社会性は大きく3つの構造から成り立っていることがわかった。第1に「ある目標に対して自分なりに考え、物事をうまく遂行していこうとする能力」である“目標遂行因子”と、第2に「自身の意見や考えを他者に伝えることに必要な能力」である“意思表示因子”、そして第3に「他者を理解し、自身にできることを考えるなどといった、他者との関わり合いに必要な能力」である“対人関係因子”といった3因子で構成されている。因子の解釈と命名については、因子負荷量0.40未満の項目や2つ以上の因子で0.40以上の因子負荷量を有する項目については削除しながら、最終的には58項目中36項目を削除し、解析対象は22項目とした。

また、すべて正規の分布を示したため、確認的因子分析を行った結果、複数の因子にまたがった3項目を除外すると、山本らの尺度と同様の因子構造をみることとなり、信頼性の数値も妥当であることから、本研究においてもこの尺度を採用することとした（表1）。

2) 学年と社会性獲得状況の関連性

「社会性測定尺度」で得られた、社会性得点において、学年間での比較を行った（図1）。

表1 社会性の因子構造

因子解釈と構成項目	(主因子法：Varimax回転)			
	因子負荷量			
	F1	F2	F3	共通性
第1因子：目標遂行($\alpha=0.82$)				
36 物事を実行する期間をきちんと決める	.67	.20	.11	0.49
25 計画に沿って進行することができる	.66	.17	.05	0.46
54 自分の問題点を明らかにし、改善していくことができる	.61	.19	.32	0.51
11 自分の立てた目標を目指して行動することができる	.59	.20	.24	0.45
53 何事も準備や練習はしっかり行うほうである	.58	.13	.31	0.45
41 物事を実行する目的を明確にしている	.56	.31	.27	0.48
24 自分の目標が、何を、いつまでに、どれだけ達成するかがわかっている	.52	.36	.06	0.44
38 物事の優先順位のつけ方はうまいほうである	.49	.29	.18	0.40
40 いったん始めたことは、とことんやりぬこうとする	.47	.08	.30	0.32
30 課題達成のために有効な手段・方法をいつも考えるようにしている	.44	.27	.26	0.35
21 原因を振り返り、今、何が一番重要かを考えることができる	.43	.27	.32	0.36
第2因子：意思表示($\alpha=0.83$)				
2 自分の意志を相手にはっきり伝えることができる	.18	.77	.25	0.68
1 人前で大きな声で、はっきりとした口調で話することができる	.17	.74	.22	0.63
32 自分の意見が通らない時は、反論できる	.24	.59	.15	0.42
50 先輩や目上の人と意見が違っても、自分の意図を説明できる	.28	.56	.22	0.44
19 大勢の人の前で、落ち着いて話をするができる	.28	.56	.14	0.41
第3因子：対人関係($\alpha=0.79$)				
16 他人の良いところは自分にも取り入れたいと思う	.16	.11	.63	0.44
28 性別や年代に関係なく、誰とも仲良くしたいと思う	.07	.21	.60	0.41
10 他人からの期待には応えたいと思う	.27	.11	.56	0.40
45 自分によくしてくれる人に対して、自分もよくしてあげたい	.08	.12	.55	0.33
22 仲間づくりや人との交流を深めるために、何かしたいと思う	.32	.23	.53	0.44
4 他人が困っている時は、助けてあげたいと思う	.20	.20	.53	0.36
因子負荷量の2乗和	4.29	3.30	3.15	10.74
因子寄与率	17.14	13.23	12.60	42.97
累積寄与率	17.14	30.37	42.97	
因子間の相関				
F1 目標達成	1.000			
F2 対人関係	0.598	1.000		
F3 意思表示	0.551	0.472	1.000	

† 複数の因子に負荷量を示した項目は除外した
‡ 相関係数はすべて有意である（1%水準）

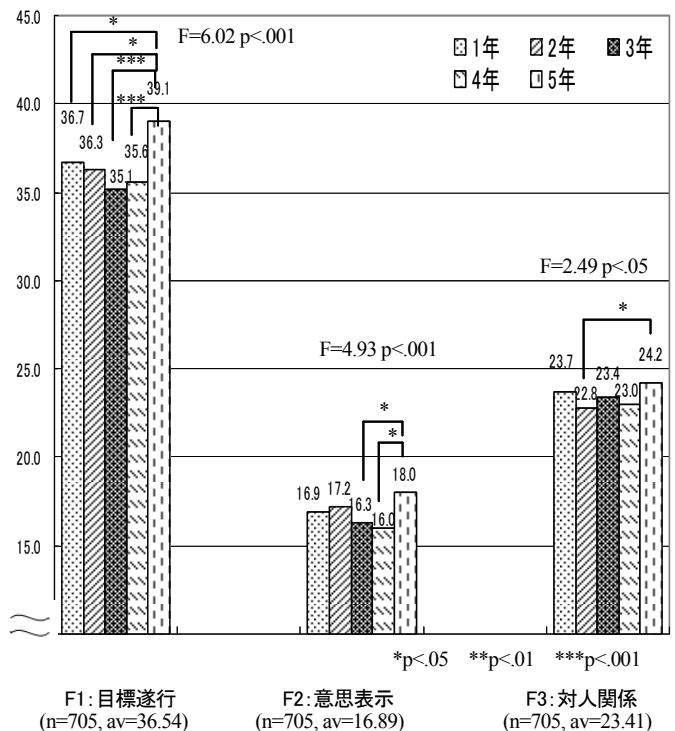


図1 社会性得点の学年間比較

この結果からわかるように、すべての項目において、5年生がもっとも高い値を示した。さらに、「目標遂行」においては、すべての学年との間に有意差が確認でき、顕著に高い値を示している。

また、すべての項目において、1年生より3・4年生が低い値を示していることも注目すべき点である。「目標遂行」、「対人関係」に限って言えば、2年生も1年生より低い値を示し、5年生に次いで1年生が高い値を示している。このことは、一般的に使われている「中だるみ」という学校社会の特性とも言うべき状態が、社会性得点の結果からも窺えるのではないだろうか。

3) 部活動と社会性獲得状況の関連性

(1) 部活動参加及び学年間の比較

表1で抽出された因子構造をもとに得点化したものを、部活動所属者と非所属者間及び、学年間で比較・検討した(表2)。

表2 社会性得点の学年間比較(所属の有無、平均値)

		所属者(489名)					F値	多重比較 (Tukey・5%水準)
		1年(163名)	2年(149名)	3年(145名)	4年(119名)	5年(128名)		
目標遂行	所属	36.59	37.23	35.23	35.76	39.71	4.50 ***	5>1,4,3
	非所属	37.42	33.98	34.83	35.56	38.42	3.22 *	5>2
意思表示	所属	17.09	17.75	16.37	16.00	18.24	4.25 **	2>4, 5>3,4
	非所属	15.83	15.83	16.14	16.02	17.74	2.45 *	n.s.
対人関係	所属	23.68	23.42	24.06	23.51	24.54	1.08	n.s.
	非所属	23.71	21.31	21.31	22.35	23.80	4.04 **	5>2,3

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

† 多重比較の欄の数字は、学年を示すものである。

表2を見てわかることは、部活動に所属している5年生のほうが、すべての項目において顕著に高い値を示しているということである。「学年と社会性獲得状況の関連性」においても、部活動所属者と非所属者との平均値比較では、3因子ともに部活動所属者の方が非所属者より平均値が上回り、部活動参加者の方が獲得している社会性は富んだものであると考察できる。

このことについては、西(2006)の愛知県内某公立高等学校生徒への調査¹²⁾や、山本ら(2007、2008)の某私立高校に施した同様の調査においても、部活動所属者のほうが、社会性項目の平均値は高い値を示した^{6) 13)}ことから、高等学校期に部活動に所属することは、非所属者よりも、社会性を獲得できるということが出来る。さらに、社会性因子別に見ていくと、「5年生の部活動所属者」

がどの社会性因子においても最高得点を取っていることがわかる。

このようなことから、5年間の高専生活、もしくは5年間学校部活動を続けるということが、より高い社会性を獲得させる要因となっているのではないだろうか。最高学年になり、卒業後の進路を視野に入れ、部活動も引退に迫ってくるこの時期に、社会性の高まりを見せるのではないだろうか。しかしながら、この結果においては、「本学の学年の特性」というものが大きく関連していることが考えられ、これらのことを明らかにするためにも、今後、現在の1～4年生の追跡調査を行い、縦断的な調査研究を施す必要がある。

4) 部活動が高等学校期の前向きな意識・態度形成にもたらす影響力

学校行事への参加について、部活動所属者と非所属者の間で有意差が確認できた(表3)。これを見てわかるように、すべての項目において部活動所属者の平均値が高く有意差も確認できることから、部活動所属者のほうが非所属者よりも学校行事において意欲的であることがわかる。特に、「スポーツ大会」や「弥生祭」などの活動的な学校行事に加え、「学校の定期考査に一生懸命にかかわりたいと感じている」、「勉強の成績をあげたいと感じている」という項目でも顕著に有意差が確認できることから、学校部活動所属者は、「学業面」にも意欲的であるということが出来る。

さらに、学校行事に意欲的に参加する部活動所属者のどの社会性が影響力をもっているのか、各社会性因子(目標遂行スキル、意思表示スキル、対人関係スキル)ごとに社会性獲得度の高群・低群にわけ、学校諸活動との関連を見た(表4、表5、表6)。なお、社会性獲得度の高低群は、平均値±標準偏差を基準に抽出している。

表3 部活動参加別にみる「学校諸活動」との関連(平均値)

項 目	所属者(SD) n=473	非所属者(SD) n=212	t値
学校のスポーツ大会に一生懸命にかかわりたいと感じている	3.00(0.85)	2.79(0.87)	2.94 **
「弥生祭」に一生懸命にかかわりたいと感じている	3.01(0.85)	2.59(0.86)	5.84 ***
「校内一斉清掃」に一生懸命にかかわりたいと感じている	2.52(0.85)	2.41(0.85)	1.60
学校の定期考査(中間・期末)に一生懸命にかかわりたいと感じている	3.10(0.90)	2.82(0.93)	3.75 ***
勉強の成績をあげたいと感じている	3.44(0.77)	3.17(0.87)	4.07 ***

[4 大変感じている 3 まあ感じている 2 あまり感じない 1 まったく感じない]

p<.01 *p<.001

表4 部活動所属者の社会性獲得にみる「学校諸活動」との関連 (F1: 目標遂行、平均値)

項目	高群(SD) n=129	低群(SD) n=93	t値
学校のスポーツ大会に一所懸命にかかわりたいと感じている	3.32(0.73)	2.39(0.99)	8.07 ***
「弥生祭」に一所懸命にかかわりたいと感じている	3.15(0.82)	2.44(1.06)	5.60 ***
「校内一斉清掃」に一所懸命にかかわりたいと感じている	2.68(0.94)	2.12(0.92)	4.44 ***
学校の定期考査(中間・期末)に一所懸命にかかわりたいと感じている	3.34(0.82)	2.66(0.99)	5.63 ***
勉強の成績をあげたいと感じている	3.58(0.69)	3.06(0.88)	4.89 ***

[4 大変感じている 3 まあ感じている 2 あまり感じない 1 まったく感じない]

***=p<.001

表5 部活動所属者の社会性獲得にみる「学校諸活動」との関連 (F2: 意思表示、平均値)

項目	高群(SD) n=109	低群(SD) n=135	t値
学校のスポーツ大会に一所懸命にかかわりたいと感じている	3.33(0.82)	2.50(0.94)	7.25 ***
「弥生祭」に一所懸命にかかわりたいと感じている	3.17(0.90)	2.59(0.94)	4.83 ***
「校内一斉清掃」に一所懸命にかかわりたいと感じている	2.54(0.98)	2.30(0.87)	2.01 *
学校の定期考査(中間・期末)に一所懸命にかかわりたいと感じている	3.13(0.97)	2.89(0.92)	1.97 *
勉強の成績をあげたいと感じている	3.50(0.75)	3.25(0.87)	2.31 *

[4 大変感じている 3 まあ感じている 2 あまり感じない 1 まったく感じない]

*=p<.05 ***=p<.001

表6 部活動所属者の社会性獲得にみる「学校諸活動」との関連 (F3: 対人関係、平均値)

項目	高群(SD) n=160	低群(SD) n=114	t値
学校のスポーツ大会に一所懸命にかかわりたいと感じている	3.29(0.74)	2.44(0.89)	8.64 ***
「弥生祭」に一所懸命にかかわりたいと感じている	3.23(0.80)	2.40(0.93)	7.83 ***
「校内一斉清掃」に一所懸命にかかわりたいと感じている	2.64(0.95)	2.17(0.84)	4.28 ***
学校の定期考査(中間・期末)に一所懸命にかかわりたいと感じている	3.31(0.83)	2.70(0.96)	5.56 ***
勉強の成績をあげたいと感じている	3.68(0.62)	3.10(0.90)	6.37 ***

[4 大変感じている 3 まあ感じている 2 あまり感じない 1 まったく感じない]

***=p<.001

これらの結果より、社会性因子項目のうち、「目標遂行スキル」「対人関係スキル」が学校行事への意欲的参加を促す主要因であることが確認できる。しかしながら、「意思表示スキル」においても有意差が確認できることから、社会性因子項目すべてにおいて、獲得したスキルが高いほど、学校行事には積極的であることがわかる。

換言すれば、技術指導のみに特化しない部活動指導、つまり“社会性獲得への導き”を施すことは、子ども(学生)の学校生活をより豊かにする可能性を有していることが示唆される。

また、このことは、これまで教科の違い(体育・スポーツの専門性を有していないこと)から部活動指導に“拒否反応”を抱かざるを得なかった教員においても、部活動指導を担う意義として再確認することができるのである。

“社会性獲得”という視点は、本学の「部活動指導の全員化」に際し、子ども(学生)が部活動に関わっていく目的を活動ばかりに囚われることなく、多角的に捉えることへの第一歩となろう。

6. まとめ

本研究では、高等学校期の部活動への関わりと社会性獲得の関連性について実証的に検討するために、本学生を対象に質問紙調査を実施し、社会性の構造分析ならびに部活動がもたらす影響について考察してきた。本研究において得られた知見は以下のとおりである。

- 1) 社会性項目の得点は、部活動所属、非所属に関わらず、5年生が高い。また、社会性因子別に見ていくと、「5年生の部活動所属者」がすべてにおいて最高得点である。
- 2) 学校行事への参加において、部活動所属者のほうが非所属者よりも大いに意欲的である。社会性項目の平均値においても顕著に有意差が見られた。

以上2点より、今後の研究継続にあたり課題として挙げられることは、本結果において一部確認されることとなった「高専5年次での社会性得点の高まり」をより詳細に検討していくことである。このことに関しては、高等学校生を対象にした、山本ら(2007、2008)の先行研究においても高等学校最高学年となる3年次において、社会性得点は最も高い値を示している^{7) 14)}ことから、学校機関においては、その学校における「最高学年」に最も高い社会性を獲得できると考えられる。

また、5年生が社会性の高まりを見せた背景(要因)には、最高学年、進学・就職活動、部活動の引退など、さまざまな事柄が起因している可能性

が高い。現に4年生と5年生では、すべての項目において5年生の方が高く、そのうち2項目については有意差も確認できていることから、単に「進級」というものが関係するというよりも、この「4年生から5年生への進級」がもつ意味は、社会性獲得に大いなる影響を与えていると感じざるをえない。このことに関しては、山本ら(2008)が、縦断的研究を施し、「1年生から2年生へ進級する際の社会性得点の低下、2年生から3年生に進級する際の社会性得点の高まり」を明らかにしている¹⁵⁾ことから、現在(調査時)の5年生が、もともと高い状態にあったとは考え難く、4年生から5年生(最高学年)への「進級」が、社会性獲得に大いに関連しているということができる。

また、本研究においては、高等学校期に部活動に参加することの今日的意味やその有効性を再考することを目的とした。上記2)に見られるように、部活動所属者の方が、非所属者よりも学校行事に大いに意欲的であることから、部活動に参加する学生が増えることは、活気ある学校行事、ひいては、学校自体の活性化が成就される可能性が高い。本学生の中にも、本学への入学を希望した理由の一つに、「高専で部活動がしたかったから」と答える学生が存在する。「高専」という専門性に秀でた学校において、これまでの部活動の位置づけが、「補足的」な役割だったとしたら、もう一度考え直さなければならない。そういった意味で、本学教員の「部活動指導者の全員化」という取り組みは、学校全体の活性化へ繋がっていくことが期待できるのではないだろうか。

最後に、本研究において、分析を進めていくうえで認識することとなった制約事項と今後の課題を記しておきたい。

まず制約事項として挙げられるのが男女比である。分析対象となった704名のうち、男子636名、女子68名と、女子学生の数が極端に少ない。したがって、本研究においては、高等学校期における部活動の有効性と、「高専」における社会性獲得状況と部活動との関連性の一端を確認できたと感じている。

今後の課題としては、対象校と対象者数を拡大・増大し、本研究結果との比較・検討作業が必要である。また、本学に見られた、「5年生(最高学年)での社会性の高まり」さらには「部活動所属者は非所属者より、学業面および学校行事に意欲的であること」という結果は、先行研究の結果ともほぼ一致する^{8) 16)}ことから、単に「本学の特性」というよりも「高等学校期の生徒(学生)の特性」だと推察できる。そこで、今後、部活動が子どもたちにもたらす「社会性」の質的構造に関

して、探索的研究を施す必要性を感じる。

引用文献

- 1) 「平成16年文部科学白書」 文部科学省 第一部 第一章 第4節 図表1-1-11
- 2) 「運動部・スポーツクラブ所属の有無と体力測定・テストの結果」 文部科学省 平成19年度体力・運動能力調査
- 3) 門脇厚司 「子どもの社会力」岩波書店 1999 pp.175-176
- 4) 中西純司ら他 「子どもの運動・スポーツ活動と『社会力』との関連性に関する実証的検討」 福岡教育大学紀要 2007 第56号 p.144
- 5) 山本浩二ら他 「高校生における社会性獲得に関する実証的研究ー運動部活動参加状況による比較・検討を中心にー」 別府溝部学園高等学校紀要 2007 第19号 pp.50-62
- 6) 5) と同書
- 7) 5) と同書
- 8) 5) と同書
- 9) 水内宏 「学校教育における『運動部活動』の意義」 体育科教育 大修館書店 2000.6 p.21
- 10) 谷口源太郎 「大学スポーツの危機」 体育科教育 大修館書店 2006.1 p.45
- 11) 近藤義忠 「これからの社会と部活動のあり方」 学校体育 日本体育社 1988.10 pp.20-21
- 12) 西和任 「高校生の“社会性”獲得状況とその背景要因に関する探索的研究ー運動部活動参加との関連性に焦点化してー」 愛知県教育委員会教員 10年研修会レポート 2006
- 13) 山本浩二, 神野賢治 「高校生に関する社会性獲得に関する縦断的研究-年次推移による比較・検討を中心に-」 別府溝部学園高等学校紀要 2008 第20号 p.49
- 14) 13) と同書
- 15) 13) と同書
- 16) 13) と同書

参考文献

- 1) 三本松正敏 「スポーツ社会学における“社会化”研究の展開と課題」 福岡教育大学紀要 1981 第31号 pp.139-149
- 2) 玉江和義、谷口勇一、吉田毅 「福岡県内某公立高等学校1年生における精神健康と疲労に関する探索的研究ー中学校からの運動部活動歴との関連性の検討ー」 健康科学 20 pp.93-98, 1998
- 3) 永井洋一 「スポーツは『良い子』を育てるか」 日本放送出版協会 2004
- 4) 吉田浩之著 「部活動と生徒指導-スポーツ活動における教育・指導・援助のあり方-」 学事出版 2009
- 5) 荒井貞光 「これからのスポーツと体育」 道と書院 1986
- 6) 荒井貞光 「クラブ文化が人を育てる-学校・地域を再生するスポーツクラブ論-」 大修館書店 2003